

第12号 華山会報

平成16年4月11日
財団法人華山会

怒りの一文

東洋史学者・朝鮮学会顧問・日朝古代史専攻

村山正雄



「一筆啓上仕候。私事老母優養仕度より誤り・半香義会に感じ三月分迄認跡は一半に相成置候処、追々此節風聞無実の事多く、必災至り可申候。然る上は主人安危にもかゝはり候間、今晚自殺仕候。右私御政事をも批評致ながら不愼の儀と申所落可申候。必竟情慢不自顧より言行一致不仕之災に無相違候。是天に非ず自取に無相違候。然れば今日の勢ひにては祖母始め妻子に非常の困苦は勿論、主人定めて一通には相済申間敷哉。然れば右の通相定候。」

定て天下物笑ひ悪評も鼎沸可仕尊兄厚く御交りに候とも、先々御忍可下候。数年の後一変も仕候はば、可悲人も可有之哉、極秘永訣如此候。 頓首拝具

十月十日

椿山老兄

御手紙等は皆仕舞申候」

華山易算して一六〇余年、果せた哉、華山がその遺言で予言した通り、華山を物笑いの対象にした書物があらわれた。夢食つ虫もすぎすぎ、というところか。しかしそれではすまない。ことは泉下の華山の名譽に關わる。

先日私は書店でふとこの本に目がとまった。その本の帯紙の大きな活字、「鳥井甲斐守忠耀は本當に悪人だったのか？」云々、二十字余りの文字がおどっている。鳥井甲斐守忠耀、予てから私も興味をもっている人物である。華山渡辺登はいうまでもない。いままで小説の形を借りた発表で歴史上の人物の定説が覆るというようなことは往々にしてあった。本書も新史料を提出して日本史(国史)学界に定説の一部見直しを迫る新研究書の出現かと思いがオドッた。一応目を通してみよう。と一本を求めて丹念によんでみた。正直のところ私は著者を識らない。蘭学や洋学の研究者ではないことは確かである。しかし新人がとぜん目ざましい報告を発表するのは学界の恒である。ともかく精読してみた。結果は「何だ、こりゃ」である。感じられたのはいろいろと文章の表現に工夫をこらしているが実体は何のことはない華山に対する批判というよりは陰湿な誹謗の書である。こつこつ形で華山を扱つたり口はまことに意地悪く陰険ですらある。私はこつこつ種類の本を読んだ後は洵に気分が悪い。中国の故事に、いやな話を聞いたあと耳を洗い、口をすすぐ話があるが、読後まことに不快、読んで得るところは一つもなかった。

反射的に私は松崎謙堂が渡辺華山のためにときの老中水野忠邦にあて、上申したかの三千余文字の嘆願書(天保十年七月二十八日)を想起した。

すでに先人も指摘しているように、謙堂のこの一文はたんなる助命嘆願書などというものではない。こつこつ形式を借りた一種の政道批判の書である。救われたのは華山の一念だけに止まらない。老中水野越前守忠邦、その人自身であるという先人のことばは肯綮にあたっている。

(注) 1 むかし許由という人物は政權讓渡に関する話を聞いて潁川に耳を洗った。巢父という人はその話を聞いて、その水すら汚いと言って渡らなかつたという。この話はすでに鎌倉時代に日本に伝わっていたらしい。これは「黄梁一炊圖」のモチーフに通じるものではあるまいか。



田原市博物館

華山先生と私

田原市議会議長
関保則

昨年八月二十日、田原町は赤羽根町と合併し愛知県で三十二番目の市として田原市が誕生しました。それに伴い議長の出席する会議も大きく変わりました。それまでの宝飯、渥美の町の議員さんとの付き合いから愛知県全域の市の議員さんとの付き合いに変わりました。当然ですが初対面の方ばかりです。人口規模は小さいですが、今まで先輩の方が築いてきてくださったおかげで財政的にも恵まれ、施策も充実しているのでも小さくならず誰とでも当たり前にお話ができることを本当にうれしく思います。そうはいつても新しく仲間入りをさせていただいたのですから少しでも田原市をわかっていただけけるよう一生懸命努力をしています。

先日、愛知県の全部の市の議長さんが集まって議長会が開催されました。そこで横に座った議長さんに田原市の紹介をしようとする時「渡辺華山先生のゆかりの町ですね。博物館にも二回行きましてよ」と先に言われてしまいました。愛知県の議長さんの集まりですから知ってる方がいっても不思議ではないのですがその話しぶりに華山先生を私よりもずっと知っておられ、しかも尊敬されている様子がうかがわれとてもうれしく思いました。

もう一つこの欄にもよく登場する華山劇についてです。二十数年前、たぶん田原青年会議所の設立の時だったと思いますが、その記念に田原中部小学校に無理にお願いし全国から集まったメンバーの前で上演していただきました。終了後、多くのメンバーから「とても素晴らしいものを見せていただいていたがどう」「感謝と感動の言葉をいただいたのを今も鮮明に思い出します。そのことがあつてから機会があることに」「華山劇は一度見ておくといよいよ」と周りの人に勧められています。



鈴木原議さんは会報九号でこの華山劇の合唱隊で歌えたことをほこりに思えたと言っていておられます。おかしなものです。私は華山劇の配役にも合唱隊にも選ばれないのにそれが今でも華山先生のせりふも歌もほとんど覚えているのですから。そして今は華山劇の最高の応援者になっているのですから。出られなかつた私にこれだけ影響を与えてくれた華山劇がいつまでも続いてほしいと思いい、感動を与え続けてほしいと思っています。また今年も学芸会のかくになつたら「ぜひ一度見に行つてよ」とPRしていると思います。

目次

P	財団法人華山会 田原市博物館
P	高野長英獄中草稿 『鳥の鳴聲』
P	高松小学校で聞きました 「華山を知ってますか？」
P	神島紀行
P	(孔門十哲像の内) 竹村悔齋賛 『文水筆室予像』
P	田原市博物館所蔵品から
P	「自律狂歌草稿」鑑賞(4)
P	渡辺華山の 『猛虎図』
P	「駄舌小記」「駄舌或問」
P	画家渡辺華山の心象
P	田原市議会議長 目次
P	怒りの一文 村山正雄
P	題字「華山会報」華山会理事 小澤耕一

画家渡辺華山の心象

重要美術品 猛虎図

天保九年（一八三八）絹本墨画淡彩

縦一七二・六cm 横八六・六cm

財団法人平野美術館（静岡県浜松市）所蔵

猛虎肉酔初醒時、指摩苛痒風助威、古松未覚先低、木末応有行人知 戊戌蕤賓端午後一日、華山外史登

— 図中左にある賛は、江西省修水の出身で黄山谷こと黄庭堅の七言絶句によるものです。

北宋の時代（九六〇～一二二七）、詩文書画に卓越した文人・黄山谷（一〇四五～一一〇五）は、古きを尊び、俗界と隔絶した書で新生面を開き、詩人としては蘇東坡こと蘇軾、陸游と並び称されました。

落款印には、白文方形印の「華山樵者」と朱文方廓印の「渡邊登印」を、右下に白文長方印の「摹古」を使用しています。

左上方から右下へ強く吹き付ける風に押さえつけられる松と草竹に対し、毛を逆立て、ぐつと正面を見据えた両目、次の瞬間まさに動き出すとする一瞬を予見させる猛虎の姿が見る者を圧倒的に威圧します。虎を絵でしか見たことが無い者も、生きて感じる虎とはこういう動物であろうと感ずることができたでしょう。

この猛虎図に付属する資料として、豊橋市出身の漢学者で、有栖川宮に講義をし、『康熙字典』なども編集した石川鴻斎による作画経過に関する伝承があります。田原藩は前芝村（現豊橋市前芝町）の御用達商人の加藤家に対して四千五百両の借財があり、天保七年

に狩野安信の紙本墨画の破墨山水画を贈り、永世五人扶持の給与を与えて借金を棒引きにする交渉を行った。その時、加藤家は藩家老華山が描く猛虎図を請い、華山は命により、数十枚の下書きを描き、三年目の五月六日にこの図を完成させた。加藤家の先祖に加藤清正があり、そのため虎の図を求めたというものです。

虎は霊力と武力をあわせ持つ動物として、当時の日本では見ることができませんでしたが、古くから中国では神話に登場しています。繊細な

虎の体毛の描写と鋭く早い筆で目に見えない風や木草を描き出し、当時の華山の技量を感じさせる動物画の名品です。

また、この図の対幅とするため、華山の息子小華が明治三年に描いた雲龍図が付属しています。昭和十年八月三日に重要美術品に認定されています。

田原市博物館学芸員

鈴木利昌





渡辺華山の著述である「駄舌或問」は、「憤機論」「西洋事情書」とならんで、蛮社の獄に際して、家宅捜査され、幕府に没収されたため、実物を拝見することはできませんが、いくつかの写本が残されているので、「蓬左文庫本」の資治雑笈・第二輯・四の駄舌或問序・駄舌小記・駄舌或問を取り上げてみることにしました。

一、テキストとしての写本には、つぎのような違いがあります。

旧版「華山全集」(底本不詳)、
「蓬左文庫本」・「村上文庫本」は旧版『華山全集』と内容は同じですが、或問の順序が数か所異なっています。佐藤昌介先生のものは、旧版『華山全集』を参考にしたといわれていますが、漢文の序文が最初になっていません。

岩波書店『日本思想体系』(底本は「内閣文庫本」「海防続彙議」、校合「静嘉堂文庫本」)
「内閣文庫本」は、人品、風俗、干戈、国賞、江戸御城、御老若の御邸宅、医学の致方、町

医、牢獄に医を撰み、解体は、「我国ニテハ」の問、始めて従事する解剖、ハーネマンの療法、近來發明の燐、月中の動物とは、諳厄利亜のモリソンの一六項目が欠如して二三項目となっており、漢文の序文がありません。

「海防続彙議」は、月中の動物とは、医学の致方、ハーネマンの療法、近來發明の燐、諳厄利亜のモリソンの五項目が欠如して三四項目となっております。

「静嘉堂文庫本」は、人品、風俗、干戈、国賞、江戸御城、御老若の御邸宅、町医、牢獄に医を撰みの八項目が欠如して三一項目となっております。

参考資料として、天保八年の「客坐掌記」第九二丁から第九五丁にわたって、「駄舌或問」のメモと思われることが記載されていることを付記しておきます。

二、内容
駄舌とは、もずの声に似ているということから、蛮夷人のことをいい、或問とは、渡辺華山など蘭学に傾倒している人たちが、ニーマンに質問することをいっています。天保九年(一八三八)江戸参府した長崎蘭館長ニーマンが、三月二五日將軍に拝礼したのち、三月一九日長崎屋で質問応答した記録であります。内容はつぎのとおりです。

漢文の序文
駄舌小記
五(一)の紹介
三九項目にわたる質疑応答の記録



鳴舌或問序
先王繼位九上則別諸君於其居先王不古稱
祝西海地極之區其教異殊洋俗甚隔亦皆
會歸極至德之風三手然而波之波之鋪地亦
古者洞何蓋世運以終之會委海東島來之事是
擾焉或欲漸法者幸今時勢則今非古故以
古法今者既在極其何神神狀或好事論也
亦如舟師望漢樓晚習如而不難其意物是出
於射廣海船柱增給語年哉
邦四聲五聲
國家遠之以爲同發故志門無以內修安請斯

鳩舌或問序(底本は鳩舌)

先王疆理九土、判別畿荒、此道為夷狄不可狽、況西海絕徼之區、其教異端詐偽、其俗市儈貪鄙、何足傳之風之乎、

先王の九土を疆理し、畿荒を判別す、此道は夷狄の為に狽ざるべからず、いわんや西海絶徼の區、その教は異端詐偽、その俗は市儈貪鄙、何ぞこれを傳へ風するに足らんや。

天下の国境を正し、国土と外国を区別したい。聖人の道は、野蛮な異民族のために世の中が乱されてはならない。ましてや、西洋の外国は、その教えが間違つた教えをしている。西洋人は、金儲け主義で貪欲であり、いやしい。どうして西洋のことを伝えこれを広める必要があるつか

然而孜孜汲々、録鳩舌者、獨何、蓋世運風移之會、蒼海變為桑田、華夏擾為戎狄、斯道雖無古今、時勢則今非古、故以古議今者、膠柱鼓琴、何待解釈、或好事論勢者、亦如舟師爭澳、喧嘩囂如、而不離故處、

然り而して、孜孜汲々として、鳩舌を録するは、独り何ぞ。蓋し世運り、風移るの會、蒼海變じて桑田となり、華夏擾れて戎狄となる。斯道は古今無しと雖も、時勢は、すなわち、今は古にあらず。故に古を以て今を議する者は、膠柱鼓琴、何ぞ解釈を待たん。或は事を好みて勢を論する者は、亦、舟師の澳を争う如く、喧嘩囂如として、故處を離れず。

しかしながら、気をゆるめずにもくもくと西洋人の言葉を記録することは自分ながらなせであるか。しかしながら、世の中は巡り、風俗も変わった今日、海が陸地になつたよつなものである。清朝支配の中華も混乱し

て異民族となつてゐる。聖人の道に古今といふことはないといわれるけれども、時の流れは今昔ではない。故に古い昔のように今を議論する者は、柱に膠して琴を弾くよつなもので(時勢に順応できないこと)、何か新しい解釈を待つ必要がある。あるいは、事を好んで精力的に議論する者は、船頭が水際で争つよつなもので、がやがやと騒ぎ立てて、古い習慣にこだわつてゐるものである。

釣是出於射覆臆鈞、徒增紛紜耳、我 邦四陲荒渺、國家處之以為固、鍊板為門、是以内修安靖、斯民永戴堯天、何草野之所窺哉、

釣は出於射覆臆鈞、徒らに紛紜を増すのみ、我が国は四陲荒渺にして、國家これに拠りて以て固と為す、鍊板もて門を為す也。ここを以て内修まり安靖して、斯民永く堯天を戴く、何ぞ草野の窺ふ所ならんや

おなじようにものごとを覆い隠して憶測し、いたずらにこたごたを増すのみである。我が国は、国の周りが広々として海に囲まれ、国はこれによつて防備としている。鉄板で門を固めているよつなものである。これによつて国内は治まり、やすらかに人民は天子を戴いている。どうして在野の部下たちが心配する必要があるつか。

我如此書、固非有意於此、彼犀兕此革、可以作鎧、彼斯之草可以活人、齊諧山海之著、不厭詭奇、非資以備用者乎、若夫當路重任讀之、有審其俗而知其變、

この書の如きは、固よりここに意あるにあらず、かの犀兕の革、以て鎧を作るべく、波斯の草、以て人を活かすべし、齊諧、山海の著、詭奇を厭はず、資りて以て用に備ふるものに非ざらんか、若しそれ当路重任これを読み、その俗を審かにしてその変を知り

防其微而杜其漸
無以瀆此道者
余望外之幸也哉

その微を防ぎて、その漸を杜ぎ
以て此道を瀆することなくば
余の望外の幸いなり。

この書の如きは、このような考えでいるのではない。犀や野牛の革で鎧をつくらなければならぬ(優れた見識でものを見なければならぬ)。ペルシヤの薬草で人を活かさなければならぬ。奇怪な説や荒唐無稽の書など、奇怪を嫌わず、利用して役に立つものである。重責を担うお役人がこれを読み、世の中を詳しく調べてその変化を知り、事変を防いでその進展をふさぎ、聖人の道をけがすことがなければ、わたしの望外の幸せである。

全 楽 翁 (華山の号)

博學多識、聖人尚從事於此矣
一物不知、君子恥之
況天地四方之大哉、
然芻行荒唐之説、
干寶奇怪之談、言涉浮夸、
事屬幽渺、
名可聞而實不可知也、

博學多識は、聖人も尚これに従事す。
一物知らざれば、君子これを恥づ。
いわんや天地四方の大なるをや。
然れども芻行荒唐の説
干寶奇怪の談は、言浮夸に涉り、
事幽渺に属す、
名聞くべくして、実知るべからざるなり。

ひろく学問に通じていることは、聖人も望むところであるが、一物を知らないこと、天子はこれを恥じる。ましてや天地四方は広大なもので知らないことはかりである。しかしながら、芻行(戦国時代の人)のような荒唐無稽な説や干寶(晋代の人)の奇怪な話は、誇大妄想に広がり、真実がかくれかすんでしまうことになり、名前を聞いただけで実際にはわからないものである。

唯荷蘭貢使、親歴荒外
的聞的見、足以核而可真矣

唯荷蘭貢使、親しく荒外を歴す。
的聞的見、核以て信すべきに足る。

故有客話及之者
必取以記之
固非無三傳信虎之誤

故に客話のこれに及ぶものあれば、
必ず取りて以てこれを記す。
固より三伝して虎を信するの誤り無き、
に非ざれども、

亦勝荒唐奇怪之談、
蓋事非一人而事聞之、一時而問之、
而其曰或問者
姑從便也、
夫貌髮驚眼之倫
侏離鳩舌之言、
雖不足傳之風之、
君子不知則已、
知之則不滯於物、
謂徒好博聞多識也乎哉

また荒唐奇怪の談に勝る。
けだし事は一人にしてこれを聞き、
一時にしてこれを問ふにあらす。
而してその或問と曰ふは、
姑く便に従ふなり。
それ貌髮驚眼の倫
侏離鳩舌の言、
これを伝へこれを風するに足らずと雖も、
君子知らざれば、すなわち、やむ。
これを知れば、すなわち、物に滯らず。
徒らに博聞多識を好むと謂はんや。

戊戌四月(天保九年) 都滕子(渡辺登)記

ただ、荷蘭貢使(オランダ商館長ニーマン)は、親しく外国を遊歴し、的確な見聞をもって調べ、信用にたる人物である。故に客話(ニーマンの談話)を聞くことができれば、必ず、聞いて記録しておきたい。もとより大勢が言い伝えると無限の言葉も信用し、誤のないように聞こえるけれど、まだ、荒唐奇怪の話よりは勝っている。けだし、話を聞くことは、ひとりでこれを聞き、一時にこれを質問するものではない。だからして、或問という意味は、一時の便宜からである。貌髮驚眼の倫(西洋人)、侏離鳩舌(外国人)の言葉は、これを伝え、表現するのに充分ではないが、君子はわからなければやめる。すなわち、物事に滯らず、いたすらに広く学問に通じることのみを好むものではない。

戊戌(天保九年)四月 都滕子(渡辺登)記

渡辺華山の「自律狂歌草稿」鑑賞(4)

十一、我いため

(狂歌)

物言の重之

我いため人うちけん
くわ仲立ちにくたけて
物をおもふころかな

(狂歌の意)

自分をいためつけ他人を殴るけんかの
仲裁に自分だけが心も砕けてあれこれ
と物思いをするこの頃であるよ。

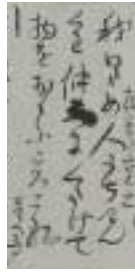
(本歌)

源 重之

風をいたみ岩つつ波のおのれのみ
くだけてものを思ふころかな
百人一首・四八

(歌意)

風が激しいので岩を打つ波が、岩はどつ
にもならなくて波自身が砕け散ってしま
うように、私の思いも相手を動かすこと
もなく、自分だけが心も砕けてあれこれ
と物思いをするこの頃であるよ。



(鑑賞)

本歌の「風をいたみ」といふのは、形容詞「いたし」の
語幹に接尾語の「み」がついたもので、「・・・が・・・
なので」の意味になる。随って、風が激しいのでの意とな
る。又、「波の」の「の」は比況の意を表す格助詞である
ので、「波のよつに」の意となる。この本歌は、上から順に読んでくると、まず怒濤
が激しく岩に当たって砕け散る風の海の情景が目につく。しかし、「波の」まで読
むとこの情景が比喩として使われていたものであることが分かっておやつと思われ
れる。そして、末の句の「思ふころかな」までいって、「この一首の主題が風の海で
はなく、恋の物思いであったことが分かって、なるほど納得するのである。こ
こでは、波は風のように恋の炎を燃やす自分自身であり、岩はその自分の思いを冷

たくはねのけて動くともしない相手の女である。「うつ見てくると、この一首な
かなか新鮮な技巧とすばらしい感覚の冴えが見られる秀歌だといふことができる。
華山の狂歌は、その下の句の「くだけてものを思ふころかな」を本歌取りして、
恋の物思いを喧嘩の仲裁をする人の物思いとすり替えたのである。「我いため人うち
けんくわ」の部分は本歌の「いたみ」と「つつ」の同音異義を何とか利用しようと
する跡がうかがわれるが、ややぎくしゃくとした表現になってしまった感があるの
が惜しまれる。しかし、その着想はなかなか面白く、本歌の世界を単俗な現実の世
界に引き下ろしてしまつてころがいかに狂歌的である。

作者名のもじりにも一工夫が見られて好ましい。

十二、常盤なる

(狂歌)

(本歌)

源 宗行朝臣

常盤なる松にならへる
梅漬は今一塩の
色まさりけり

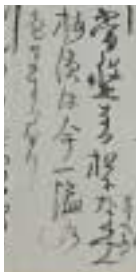
ときはなる松のみどりも春くれば
今ひとしほの色まさりけり
古今集・巻一・春上・二四

(狂歌の意)

年中その色を変えない常緑の松の葉の
上に並べた梅漬は今一塩の塩が加わり
赤い色が勝ってきたことだよ。

(歌意)

(松の緑は年中その色を変えないと言われ
るが、) 変わらない松の緑でも春が来ると
更に一段と色が濃くなったことだよ。



(鑑賞)

本歌は古今集の春上に出ている源宗行朝臣の歌である
が、これまで出てきた本歌ほどに人口に膾炙した歌ではな
い。それを華山がこのように本歌として利用してきたのは
それなりの和歌的な素養があったことであろうが、それ
にしてもこのようにいくつも百人一首以外の和歌が口をついて出てくるというのは決
して容易なことではない。きつと何かこうした和歌の載っている種本が歌集のような
ものが華山の手元にあつて、それによって、狂歌を順に詠出していったのであつた。

この本歌は、春になって一段と色の濃くなる松の緑の鮮やかさにはじめて気付いた驚きを詠んだものであるが、狂歌では、その松の緑の葉の上に赤い梅干しを並べるといふ庶民的な風景に転化することで、機知的なおかしみをねらったものだと言っている。「今ひとしほの」を「今一塩の」と同音異義をうまく利用したところがいい。

十三、まんちうを

(狂歌)

まんちうを買ひたる
銭を数ふれ八これ
こそ中八最中なりけり

(本歌)

水の面に照る月なみを数ふれば
今宵ぞ秋の最中なりける
拾遺集・秋・一七一

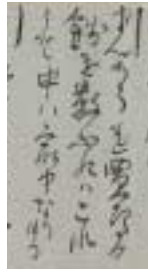
(狂歌の意)

饅頭を買った銭を数えてみたら、何と財布は最中(もぬけの殻)であったよ。

(歌意)

水の面に照る月の数を数えてみると、今宵がちょうど秋の真ん中に当たることだよ。

(鑑賞)



水面の月に秋の盛りを感じたという本歌の趣向を、狂歌ではもぬけの殻の財布に変えているところに面白味がある。物を買っていざ支払いをと思ったら、お金を持っていないか、財布の中のお金が足りなかったとかは、昔も今もよくある出来事。この頃では、それにカードによる支払いという方法もできて、更に便利にもなったが、中にはカードで支払おうと差し出したところではカードの支払いは扱っておりませんなどというのまであって、ややこしい。

この狂歌の場合は、本歌取りとなっている部分は「数ふれば」の部分と、下の句「最中なりけり」の部分で、やや短い引用であるが、「最中」の語に「もぬけの殻」の意をもたせたところが工夫したところである。

狂歌の「こそ・けり」は本来は「こそ・けれ」となるべきところであるが、これも江戸時代に多くなった係り結びの法則の乱れである。

十四、たれをかも

(狂歌)

たれをかもしる人に
せん頼母子のむ
かし八今の事ならなくに

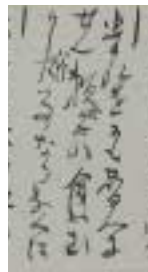
(狂歌の意)

誰を仲間によつるか。頼母子講をした昔はもつ今のことではないのだから。

(歌意)

(年老いた今、私は)誰を友人によつるか。(友人は皆亡くなって、交わる相手もない。せめて昔の松とでも語り合いたいと思うのだが)その高砂の松も昔なじみの友ではないのだから。

(鑑賞)



狂歌の中に出てくる「頼母子」というのは、京阪で金融の相互扶助を目的とした庶民の組織で、江戸では普通は「無尽」といった。数人以上がある期間内、一定の期日に一定の掛け金を掛けて、クジ又は入札によって先取りする者を決め、所定の金額を受け取って利用するものである。全員がその金額を受け取れば、その講は解散となる。

狂歌は、本歌の主題である友人もいなくなった老いの心境を昔行った頼母子講の仲間がいなくなった寂しさに置き換えて、狂歌に仕立て直したものである。本歌の「昔の友ならなくに」を「今の事ならなくに」と巧みに置き換えているところに、華山の工夫がある。「ならなくに」の「なら」は断定の助動詞「なり」の未然形「なく」は古代の打ち消しの助動詞未然形の「な」に、接尾語の「く」がついたもの。「に」は詠嘆の意味を表す逆接の接続助詞である。

研究会員 山田哲夫

田原市博物館 所蔵品から

重要文化財 文水筆宰予像

(孔門十哲像の内) 竹村悔齋賛

絹本着色

縦一〇二・九cm 横三六・九cm

賛の意味は次のとおりです。

(孔子は言った。) 錦は安心して着られるが、木はいつか朽ちる。思うにはつきりと自信のある言である。

錦乎安衣木乎曷朽 錦か安んじて衣木か曷んぞ朽ちん
蓋明決而自信之厚 蓋し明決に而して自信の厚き
洞時弊而疑喪之久 時弊を洞して喪の久しきを疑う
聖之痛誚噫有深取 聖の痛誚噫深く取る有り

文化十三撰 丙子六月

日本 後学江都竹村藤實敬書

丙子春日謹寫 文水



(宰予は) 悪い時代をさとり知って喪が長すぎるのではないかと、言った。孔子は、悲しみ嘆き叱った。もっと深く読み取ることができないのか、と。(錦のように長く喪に服せば親の思いが育つのに、木のようにすぐに朽ちてはなんにもならない。)

宰予は姓を宰、名を予、字を子我がといます。孔門十哲の一人です。魯の国の人で、弁舌の才がありました。齊国の臨淄の長官になりました。だが、田常(齊国の実力者。主君の簡公を殺して、その弟を王にたて、自分は宰相として国政を掌握した。)

の反乱に加担し、のちに、一族を皆殺しにされました。孔子はこのことを恥だとしています。

画を描いたのは、落款より文水となりますが、どういふ人物かははっきりと特定できません。文晁の一派ではないかと思われます。

賛の竹村貢は竹村悔齋ともいい、通称、海蔵と呼ばれていました。海蔵は華山と同門である佐藤一斎のもとで陽明学を学び、三河拳母藩校教授・藩主侍読となりました。華山とは親交があり、華山の文化十三年(一八一六)の日記には海蔵の名が

出てきます。性格は豪放磊落で直剛、敢えて人に屈することのない硬骨漢であったと言われております。藩の家老、津村伊佐衛門の悪政を憎んで路上で斬殺し、帰宅後、自害しました。三十六歳でした。

この作品は、昭和三十年二月二日に重要文化財に指定された渡辺華山関係資料の附として、同三十二年一月九日に追加指定され、昭和五十三年三月二十四日に歴史資料に指定替えられました。

田原市博物館学芸員
磯部奈三子

神島紀行

博物館友の会 朝倉正巳

天保癸巳（みずのとみ）四年（一八三三）四月十五日 鷲（曇り）

御系譜の御用で、巢鴨老侯（三宅友信）の三河志の御用をかねて、この日伊勢の国の神島、三河の国のさく島（佐久島）より、…

この出だして始まる渡辺華山の紀行文『参海雑志』に描かれたこの孤島の印象と、神島を一躍全国区にした三島由紀夫の小説『潮騒』に表現される美しい島とを、私なりに対照しながら、あこがれにも似た気持ちで島を訪れた。

華山が田原を発ち、高松に向かったのは、春たけなわの天保四年（一八三三）の四月十五日であったが、私たち博物館友の会・会員、市民の皆さん二十余名とバスで田原を後にしたのは、まだ残暑厳しい八月二十三日である。

華山・史学研究会の講師より、資料の説明や道中の話を聞きながら、『参海雑志』の跡を辿り、赤羽根村、若見の里、越戸、土田を経て、まず華山も一晩世話になった和地の医福寺に立ち寄った。

寺は昔の面影を残していないが、歴史を見続けてきたであろう樹齢二百年を越すナギの大木（*）

1) が私たちを見下ろしていた。ここで一泊した華山は、翌日一色村、川尻村、小塩津を通り、当時三河南部で第一の寺院と記されている常光寺を訪れている。なかなか壮大な寺で、現在でも、『参海雑志』で描かれているスケッチと同じ姿を見ることができるが、山門、回廊など痛みが激しく、それを夏の太陽が容赦なく照りつけていた。その後、紀行文の行程に従い、芭蕉塚、伊良湖神社を経て、いよいよ神島に向けて船に乗り込んだ。



神島への高速船

「伊勢湾と太平洋をつなぐこの狭窄な海門は、風のある日には、いくつもの渦を巻いた。」と三島由紀夫が記しているのに対し、華山は神島渡航のこの海を、「南は有名な遠江の灘であって、白波の争う様は白い龍が群れ踊るかのようでありたいそう恐ろしい様子である。」と表現している。とにかく大変苦勞して神島にたどり着いたようである。



華山の描いた神島渡航の図

季節が違つとはいえ、私たちはキラキラ照りつける陽の暑さを除けば、大した苦勞もなく、うねりさえない海を高速船で、わずか20分程で神島に着くことができた。



華山の絶海の孤島・神島



現在の美しい島・神島

「歌島（*2）は人口千四百、周囲一里に充たない小島である。」と三島は書き、華山は「この島の廻りは一里強で、大洋の中に押し出っていて、鳥も通わない絶海の孤島である。」と表記している。

早速、この傍にある民宿に荷物を預け、小説『潮騒』で、「歌島に眺めのもつとも美しい場所が二つある。一つは島の頂きちかく、北西にむかつて建てられた八代神社である。」と紹介されている海の神・綿津見命を祀る八代神社に向かった。



路地の角にある時計台

蛸壺が無数に並んでいる堤防を上って、華山の表現を引用すると「一足も置くことのできるような平地は無く、谷の間から磯部にかけて、人家が所狭しと立て並んでいて…」というような集落を縫う細い路地を登って行くと、かつて神島で唯一の時を刻んでいたという時計台跡にたどり着いた。



華山の描いた八代神社



今年「遷宮」を迎える八代神社

路地をしばらく上ると八代神社の白い鳥居がある。そこから本殿に向かって真っ直ぐに延びる200余段の石段を、眺望を楽しみながらゆっくりと登り切り、左に行くと八代神社に出る。

なお、この神社は今年、伊勢神宮の慣例に倣い、20年に一度の「遷宮」を迎えるが、島の過疎化が進んでいるため、以後の遷宮が少費用で出来るよう、正殿の内装や扉などを除き、鉄筋コンクリート製の建物に改築されるとの事である。

神社の背後から、左へ続くならかな上り坂を行くと、「眺めのもっとも美しいも一つ」の場所は、島の東山の頂きに近い燈台である。「と三島由紀夫の言う神島燈台に行き着く。



神島燈台より伊良湖岬を望む

「燈明山に登る。この山は島の中で最も高い山であって、中腹はみな松である。この松の根はみな横に走っていて…」と『参海雑誌』に書かれている燈明山は、標高171mであるが、元気ある皆さんは登られたが、私は、あの暑さに疲れ、残念ながら登ることができなかった。その様子を知ることではできなかった。



神島燈台



燈明台

再び同じ道を引き返し、今夜世話になる民宿で汗を洗い流し、さっぱりとしたところで、夕食の海の幸に舌鼓を打った。

『参海雑誌』には、「酒と飯とを出す。肴はサワラの刺身、アイナメという魚の煮た物、鮑の酢に浸けたもの、皆旨くたべることができたが、船に揺られたからであるうが、頭が重く、酒ばかりが頭の上って眠けを催し、横になって気持ち良く寝入ってしまった。」とある。

「十七日 晴 目が覚める。海の朝日の出るのを見ようとして東の磯に出掛けた。しばらく眺めると、越戸・小塩津の山とも思われる方向に丹塗りの盆に黄金の針を植えたようにゆらゆらとさし昇る太陽の光は、紺碧の波を射て、絵でも口でもとても及びもつかない有様である。」とあるが、私は翌朝、この情景を頭に描きながらも、未だ床の中にあり、既に夏の陽も高く昇っており、急いで朝食に向かった。

本日の行程は、古里の浜、鍾乳洞、弁天岬、観的哨跡である。

民宿を後にして路地を上ると、小さな寺に出る。そこからは山間への道を進み、二つほど小山を上り下りすると、波静かな女性的な海岸の古里の浜にでる。ここは江戸時代まで集落があったそうであるが、今はその形跡を見ることはできない。

海岸では、夏の終わりを惜しむように、黒く焼けた膚の子供たちが水と戯れていた。少し進むと鍾乳洞に出るが、足場の悪さと波が打ち寄せていて危険と思われたので、中に入ることを断念し、しばし潮騒の音を楽しんだ。



カルスト地形の海岸



鍾乳洞に打ち寄せる波

弁天岬には東屋が設けられていて、ここでこの風景を静かに楽しむグループと別れ、石灰岩が風化してできたカルスト地形の神島不動岩を右に見ながら進む。

この舞台を一度は訪れたいと、かねてより思っていたが、当時はこの島への渡航は一度鳥羽に渡り、さらに別便の船に乗り換えての不便さもあり、なかなか困難であった。時が経ち、今回やっと昔の夢をかなえることができた。

「大きな窓が三方にあいた廃墟は、すこしも風を防がなかった。むしろ雨風を室内へみちびき入れ、その乱舞に委せているようであった。『潮騒』の一小節であるが、この後に続くシーンは、学生の頃の私には、ロマンチックであるが、ほろ苦さと交錯したような記憶がある。」



観的哨跡

山道に入り、背中に夏の陽を受けながら、かなり急な坂を息を絶え絶えにして登り切ると、『潮騒』のクライマックスとなった観的哨跡（*3）に出る。

感傷に浸りながら、しばらく時を過ごす。再び、頑張つて登つて来た坂を一気に下りきり、小・中学校の横を抜け、浜沿いの道から山間へ入つて道なりに進むと神島港が見えてくる。島内にあるただ一軒の食堂で、ビールで喉を潤し、美味しい魚で空腹を補つて一服した後、神島港から伊良湖港を経て、一路田原を目指した。暑さに負けず、二日間の楽しい旅を、全員元気に終えることができた。

*1 ナギの木 マキ科の常緑高木。高さ15〜20mにもなる。材は家財、樹皮からタンニンを取る。

*2 歌島 作者がつけた架空の島の名。三重県鳥羽市に属する伊勢湾湾口の神島でこの小説の舞台になっている。

*3 観的哨跡 鉄筋の廃墟。戦時中、伊良湖岬の小中山射撃場から発射された試射弾を確認するための観測所。

参考文献 山田哲夫 訳

小澤耕一 校訂

全訳『参海雑誌』

高松小学校で

聞きました

華山を知っていますか？

1 とき 平成十六年二月二十四日(火) 授業後
2 参加してくれた人
宇野ひとみさん(5年)、大羽瑞紀さん(5年)、
石原麻衣さん(5年)

皆さん五年生だから、まだ歴史の勉強をしてないと思うけど「渡辺華山」を知ってる？

児 聞いたことはありません。

児 ちよつと聞いたことがある。

児 どんなことを？

児 絵がうまかった。

児 腹を切つて死にました。

児 弟が、お寺に行ったこと。

児 すごく有名になつたこと。

そうですね。華山は歴史上で有名な人ですね。絵がうまかった。国宝になつてゐる絵もあります。き

みたちとあまり違わない十一・三歳の頃、家が貧しかったために、弟を寺奉公に出したんだね。雪の降る日に、弟を送つたことが、すごく悲しかったし、悔しかったと

書き残しています。それが、華山が偉くなるきっかけにもなつたんです。最後は、田原で切腹して死んだんだね。

皆さん、家におじいちゃん、おばあちゃんが見えますか？

(二人の子は、祖父母と同居している)

おじいちゃん、おばあちゃんから、渡辺華山のことを聞いたことはありませんか？

児 すごくいい人だと聞きました。

「いい人」というのをもう少し説明してください。

児 すごく努力した人ということですよ。田原市博物館へ行ったことがありますか？

児 まだ、行ったことはありません。

児 今度「みんなで行こう」と、先生が話していました。

ぜひ行ってください。博物館へ

行けば、渡辺華山のことば、全て分かると思いますよ。

「総合」の時間で、郷土のことを勉強しましたか？

児 未来の町のことを考えて、「こんな町になったらいいな。」というのを発表しました。

その中身を話してください。

児 みんなが利用しやすいバスがあつたらいいということ…。

児 それと、もっと大きくて、みんなが遊べる公園があるといい。

高松には公園はないの？

児 あるけど、小っちゃな公園です。山本公園とか、ポケット公園とかです。

児 もう一つ、環境を考えたお店ですよ。自然を壊して大きな店を造らずに、インターネットで注文ができるお店があつたらいい。

どれも大切なことばかりですね。渡辺華山も郷土の田原を立派にするために、いろいろ骨を折つた人です。華山の生きた江戸時代は、高松も赤羽根も田原も、「田

原藩」といつて一つのまとまりだつたんですよ。

児 ああ、そうか。郷土を立派にするのに活躍した人のことを勉強しましたか？

児 大羽義市さん

うーん、最後の町長さんだね。

児 『あかばね』に出ていたと思うんだけど、用水を作つた人…。「近藤さん」だつたかなあ。

近藤寿一郎さんのことだね。近藤さんは、明治三年に高松で生まれた人です。国会議員や豊橋市長にもなり、豊川用水を作るのに、非常に力を尽した人です。近藤さんは皆さんの大先輩。その豊川用水のおかげで、今の豊かな生活があるんですね。

児 すごくいい。そこまで知らなかった。華山や近藤さんのような先人の努力があつて、今の田原があるのです。歴史を勉強し、昔の人に負けないような努力をして、みなさんも偉い人になつてください。

(聞き手・文責 林和彦)

高野長英獄中草稿「鳥の鳴聲」

高野長英生誕一〇〇年を迎えた昨年、水沢市では懸案であった『鳥の鳴聲』の購入が実現しました。この資料は「鳥の鳴音」や「わすれがたみ」と呼ばれてきました。今回の調査では、その詳細が判明することにも多くの課題も提示されました。ここでは、そのなかの何点かにしぼって紹介します。

この資料が公にされた最初は明治十七年で、藤田茂吉が『文明東漸史』に高鋭一（高良斎の息子）提供資料として紹介しています。資料の名称は「鳥の鳴音」（一名和書禮加多美）で、鈴木春山に贈られたと語られてきました。

次いで明治三十二年、長田偶徳が『高野長英先生傳』で「鳥の鳴音」として紹介、資料の所蔵者として柳田阿三郎を挙げています。

しかし、これらの原本が公開されたことはなく、現在、その所在さえ確認することができません。これらが高野長英の自筆本か写本か、さらには、歴史資料として再検討することができない状態となっています。唯一、静岡県立中央図書館蔵の写本『わすれがたみ（和書禮加多美）』が現存するだけです。

このようなかで、高野長英自筆草稿『鳥の鳴聲』が公的に保存された意義は大きく、その詳細内容は平成十五年水沢市教育委員会発行『紀州遠藤家旧蔵本・鳥の鳴聲別名わすれがたみ調査概報』を参照いただくことにし、ここでは、新たに判明したうちの二三について紹介することにします。

最初に長英が獄中からこの資料を託した人物です。藤田茂吉は鈴木春山に贈ったと述べ、現在まで定説化してききましたが、その根拠は示されておりません。今回調査された箱書や付属資料から、紀州藩の遠藤勝助に贈られたことが判明しています。

次に、資料の名称についても再検討する必要があります。ここでは、「鳥の鳴音（なくね）」別名「わすれがたみ」と一般的に理解されてきましたが、高野長英は本草稿のタイトルに「鳥の鳴音」は使用していませんでした。

高野長英はタイトルについて、本草稿の第一紙に

題号

何しも不言候際も奉願上候

鳥の鳴聲

和書禮加多美

と書いています。「鳥の鳴聲」と「わすれがたみ」のどちらにも決めかね、どちらもよくない場合は別タイトルの検討も含めて依頼したものと推定されます。

ではなぜ「鳥の鳴音」になったのか。そこに、獄中の高野長英と彼の支援者の関係、さらに、世に流布する経過を解き明かす鍵が隠れているように思われます。

特に本草稿は何度も書き直され、難解な文章となっている部分も多くあります。遠藤勝助と断定できるかは別にして、だれかの校正を経る必要があります。この校正本をもとに写本が作られ、文字の異同や文章表現に差異のある「鳥の鳴音」が紹介されてきたものです。面白いことに、本草稿のところに東北弁標記が見られますが、活字本として紹介された「鳥の鳴音」のほとんどは標準語となっています。

このようなかで、「鳥の鳴聲」は採用されず、「鳥の鳴音」や「わすれがたみ」として紹介されてきたものと思われまます。

なお、高野長英が題号のひとつとして挙げた「鳥の鳴聲」は次の文章から読み取ることが出来ます。「然らば則ち我に夢物語の著作なく、花山に小記論の編集なきも、遂には讒言を免るること難し、矧んや今既に其計中に陥る。官の御明断に因て御仁政の恩波に浴するに非ずんば命を全すること実に難し。天の蘭学

に災する一に何ぞここに至るや哀し哉。蓋し蘭字を業として蘭学に死し、忠義の事をいたして忠義の事に死せば、理に於て恨る所なく、義に於て恥る処なし。且し我が夢物語に死する遺憾なきに非ず。此小冊子を見ん人、これを察せよ。此書は則ち將に死せんとする鳥の啼聲にあるぞがし」

もうひとつの候補として挙げた「わすれがたみ」は、草稿の最後に「御裁断の善悪之由、官書を以って同中之御刪正御清写奉願上候。之こと而已」と書き加えられており、幕府の裁許を前にした高野長英が死をも覚悟したなかで、自らを正しく世に伝えてほしいとの想いを込め、「わすれがたみ」として残そうとした意図が汲取れるのではないのでしょうか。

水沢市教育委員会 佐久間 賢



「題号」に係る記述



明治期の表装

財団法人華山会
田原市博物館 から
ご案内

企画展のご案内

三月二十五日～五月十六日

春の企画展「地元南画の巨匠
白井永川・白井青淵展」(企画展
示室)

同時開催 渡辺華山が描く人と
動物(特別展示室)

平常展のご案内

五月二十日～七月四日

渡辺華山のおこがれ 文人画の先
達、故事を描く(特別展示室)

芝村義邦コレクション 浮世絵
(企画展示室1)

田原の歴史 吉胡貝塚(企画展示
室2)

七月八日～八月二十二日

華椿系の花鳥画(特別展示室)

華山文庫創設70年 重要文化財
渡辺華山関係資料(企画展示室1)

田原の歴史 江戸時代の田原(企
画展示室2)

八月二十五日～十月三日

渡辺華山と師弟 水と花(特別展
示室)

芝村義邦コレクション 陶磁器
(企画展示室1)

田原の歴史 田原城藤田丸(企画
展示室2)

常設展示室では渡辺華山の生涯を
紹介しています。

特別展示室では渡辺華山系画人の
作品を中心に展示しています。

民俗資料館では田原の暮らしを中
心に展示しています。

観覧料

企画展 三月二十五日～五月十六日

一般 四〇〇円(三二〇円)

小中生 一〇〇円(八〇円)

()内は二十名以上の団体の料金
平常展

一般 二二〇円(一六〇円)

小中生 一〇〇円(八〇円)

()内は二十名以上の団体の料金
毎週月曜日は休館、月曜日が祝日
の場合は翌日

催しもののご案内

五月五日 午前九時三十分から

こどもの日企画 鎧を着てみよう

親子・一般も可、定員60人

四月一日から電話にて先着順受
付

九月二十五日 田原城跡月見会

茶席・句会等

田原市博物館友の会会員募集中

入会申込書に十六年度分会費千円
を添えてお申し込みください。

特典

博物館への無料入館

展覧会・催し物のお知らせ

見学会に参加できます。

博物館日より(年三回)・華山会
報を郵送します。

(財)華山会から

華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室

毎月第四土曜日研究会

視察研修(年一回)に参加できま
す。

華山会報 第十二号

平成二六年四月一日発行

編集発行 財団法人華山会

理事長 白井孝市

事務局長 光浦貞佳

千四四一―二四二

愛知県田原市田原町巴江二の一

TEL 五三二・二三二・一七

FAX 五三二・二三二・一七

編集・協力

田原市博物館

華山・史学研究会

会長 渡辺巨祥

林 和彦 尾川新一

山田哲夫 別所興一

林 哲志 小川金一

柴田雅芳 加藤克己

中神昌秀 増山禎之

華山会報ご希望の方は華山会館・

田原市博物館にお申し出ください。

次回発行予定平成二六年一〇月二日